

趣味縁と高齢者の社会参加:

日本の囲碁グループ活動を参照に

KIM Nahyun

本研究の目的は、「趣味縁(レジャー活動)を通じた高齢者の社会参加の可能性を探る」こととして、高齢者のレジャー活動と社会参加を「楽しみ」をキーワードに結びながら、その検証対象として高齢者のレジャー活動である「囲碁」や、囲碁愛好家が集まって主体的に行っている「日本福祉囲碁協会」と「川越 igo まち倶楽部」の活動を取り上げる。

研究意義は、高齢者の社会参加について、レジャーを媒介としたアプローチを試みることで考える。主に囲碁を取り上げて検討するが、囲碁に限って論じたいことではなく、「レジャー活動から社会へ」の視座を採り入れて、個人の楽しみであるレジャー活動に参加することとともにつながる広がりについて考察するため、以下の章ごとに検討を進めた。

第 1 章では、日本社会における人口高齢化について、少子化や長寿化が相まった過程や高齢化における日本社会に求められる対応や変化、また当事者である日本の高齢者が直面している諸課題について整理し、幅広い分野にわたって多様なアプローチを試みる活動として「社会参加」を提示した。

第 2 章では、いたわる存在から社会を支える存在として再考された高齢者像について、ロダクティブ・エイジングやアクティブ・エイジングのような高齢期の生き方に注目し、『厚生(労働)白書』での高齢者についての論調の変遷を明らかにした。そして、高齢者像の見直しにつながると予想される高齢者の社会参加について、「高齢社会対策大綱」を中心に「ボランティア活動」をめぐる政策展開を整理した。また、高齢者の社会参加についての議論が活発な中、定義や領域の曖昧さやどのようにすれば高齢者の社会参加につながるかが円滑になるかの観点から、高齢者を社会参加に導くために、アプローチの不在について検討した。

第 3 章では、高齢者を社会参加に導きうるアプローチとして、レジャー活動に注目し、高齢者のレジャー活動の全体像として、『レジャー白書』の特別レポートを中心に検討した。1990 年代半ばの日本の高齢社会の進入、阪神・淡路大震災などの急変する社会環境の中、「ボランティ

ア」が注目されるようになり、レジャー分野でもいわば「社会性余暇」が登場するようになる。当初、社会性余暇は、「楽しみのため行った活動は結果的に社会性を浴びることにつながる」レジャー活動の意味であった。しかし、瀬沼(2000)の利他性余暇や社会活動、社会参加とも混用される中、社会性余暇の前提であった楽しみより、社会性や利他性が主要なキーワードになっていく過程を検討し、「楽しみ」を土台とする個人的余暇から社会性余暇の見直しのため、趣味縁やシリアスレジャーの検討を行った。

第4章では、高齢者を社会参加につなぐアプローチとして趣味縁の可能性を試みる楽しみを通じた高齢者の社会参加の可能性を試みるため、日本のボランティア型「日本福祉囲碁協会」とまちづくり型「川越 igo まち倶楽部」を取り上げ、楽しみという個人的な要因が囲碁グループ活動の中で、どのような影響力を果たしているのか、また、それが高齢者の社会参加につながる可能性について検討した。調査参加者の趣味であった囲碁は、まず彼・彼女らを福祉囲碁・囲碁まちの活動に導いた。活動への関り方としては、偶然の機会による参加もあれば、囲碁普及、実力向上などの目標を持って自ら取り込んだ人もいる。活動を進む中で囲碁の楽しみだけではなく、「相手の喜び」や「変化」により、活動についての色合いを決めるようになり、それから活動に積極的なかわりを持つようになった。また、趣味であるにも関わらず「囲碁人口を増やしたい」、「強い子を育てたい」という目標を持って、囲碁普及活動を行っていることなど、囲碁が本人の人生の中で大きな部分を占め、価値がある活動として認識し、その楽しみを他の人も知ってほしいという側面、私が受けた恩恵をお返しするというレジャーアイデンティティを築いていることも特徴であろう。

しかし、本稿において明らかになったように、高齢者の社会参加にとって非常に重要なことは、「楽しみから社会を形成する」という視点、ならびに、その実践にある。つまり、このような視点や実践が集約される場こそが、趣味縁であり、趣味縁の形成過程から見えてくる社会問題へのアプローチが、従来の社会参加の捉え方を批判し、これからの社会参加のあり方にとって重要になると考えられる。なぜなら、趣味縁とは、ただ共通する趣味やレジャー活動の担い手が集まるだけでなく、付与された役割や関係から解放し、自由で多様な人間関係を形成する領域だからである。それゆえに、趣味縁を形成する力学や趣味縁の担い手となる主体形成の分析については、本稿で言及したステビンスの「シリアスレジャー」論をさらに精緻化・発展させることを今後の課題としたい。最後に、自由で多様な人間関係を形成する領域である趣味縁の要点を端的に語られた言葉を改めて記すことで、本稿の議論を閉じたい。